アドラー心理学の流行と現代

島崎　隆
しまざき　たかし／東京唯物論研究会会員／哲学

一、なぜいま「アドラー心理学」なのか

日本では、アドラー心理学関係の著作は、『嫌われる勇気』が一三五万部、『幸せになる勇気』が三七万部売れたといわれており、ベストセラーとなってきた*1。なぜいまアドラー心理学が注目されるのか、この両著を中心に、その内容を紹介しつつ、その積極的意義、さらに問題点をこの論文で探りたい。両著は、アドラーの化身と思われるカウンセラーの「哲人」と、カウンセリングを受けつつも彼に遠慮なく反発する「青年」とのきわめてスリリングなやりとりとなっている。こうした対話ないし議論形式の文体は、わかりやすく劇的で、おおいに読者の共感を呼ぶことだろう。こうした叙述形式を採用したことも、ベストセラーになった一因と見られる。フリーランス・ライターである古賀氏が、さらに効果的な文章表現を採用したことも推測される。こうした対話形式を選んだのは、岸見氏がもともと対話篇の哲学書を著わしたプラトンの研究者であったことが挙げられるが、さらにアドラー自身が著作をしっかりと体系的に仕上げることよりも、多くの市民と国民集会所（フォルクスハイム）やカフェなどの場で議論し、当意即妙に応答することに熱意を注いだということも無関係ではないような気がする。アドラーならば、こういうふうに生き生きと議論したのではないだろうか…。

近ロル

本誌一三五号に、若井さんによって認知行動療法、マインドフルネスの考えが展開されていた。自分も瞑想を長年やってきたことがあり、興味深く拝読した。これと関連して読んだのは、久賀谷『最高の休息法』というマインドフルネスの本で、刺激的でした。

ところで、いまやアドラー心理学ブームは、岸見氏・古賀氏の著書『嫌われる』の翻訳をきっかけに、韓国では日本にも増して熱狂的となっている。韓国では、『嫌われる』の翻訳が一一五万部販売されたといわれるが、その人口五千万を考慮に入れると、この国での熱狂ぶりがうかがわれる＊2。また台湾においても、同書の翻訳が三〇万部を超えるヒットとなっているという。同書の翻訳は、すでに中国でも発行されており、タイ、ベトナム、ギリシャ、ブラジル、ポルトガル、スペインで翻訳が決定されている＊3。ところで、アドラーの心理学は、いわゆる自己啓発の源流といわれてきており、米国のデール・カーネギーらがこれを高く評価している。

なぜこうした心理学ブームが起こるのか、またなぜとくにアドラーが注目されるのだろうか。日本社会のありかたを見てみると、展望の出ない不安定な状況が続いている。新自由主義経済のもと、規制緩和、不安定雇用、消費税増額、福祉・社会保障の削減などが進み、アベノミクスも派手に宣伝されるわりには実質的な効果が出ていないように見える。こうした状況で、若者も老人も寄る辺ない、不安な人生を歩まざるをえない。また現在、経済的に安定した人々も、将来どうなるかわからないし、多くの心理的問題を他方で抱えている場合もある。こうした状況において、人生への道しるべとしてアドラー心理学も流行したといえよう。多くの人生論、心理学、哲学、宗教論など同傾向の書物があふれるなかで、アドラー心理学のメリットといえば、その実践的性格にあるだろう。アドラー心理学は、一見極論ないし不合理に見える点が多いかも知れないが、のちに見るように、それも実に徹底した分析の結果であるように思われる。

とくにまた岸見、古賀の両氏は、アドラーを心理学者というよりも「哲学者」とみなしている。それだけ幅広く深い人間的真実をアドラーは探求したというのであろう。さらに、アドラー心理学では、アドラー流の訓練を受けたカウンセラーが数多く養成されている。その点でも、それは実践的であり、また、一種の自己分析・自己診断が可能なワークブックのようなものも出版されている＊4。

二、アドラーとはどういう人物か

アルフレッド・アドラー（一八七〇―一九三七年）はちょうど、いわゆるウィーン世紀末（世紀転換期）といわれる時代に生きた心理学者である。かつてヨーロッパの中心（中欧）にあって栄えてきた旧ハプスブルク帝国の首都がウィーンであり、彼はその近郊ルドルフスハイムの、ユダヤ人穀物商の家で六人兄弟の次男として生まれた。神聖ローマ皇帝を代々輩出し、カトリックの中心でもあった旧ハプスブルク帝国およびウィーンは、文化的に、つまり芸術的にも学問的にも幅広く発展し、産業革命とともに近代化を促進したが、その爛熟の状況にあって早々と近代の限界に到達し、現代の世紀末的状況を先取りしていた＊5。

そのなかで、大都市ウィーンでは、うつ病など精神的病が蔓延し、知識人や若者の自殺も流行した。そのなかでジクムント・フロイト、カール・ユングおよびアドラーは、心理学の三大巨頭といわれてきた。従来、フロイトもユングも偉大な思想家と評価され、近代合理主義の意識的主体性を超えた現代的地平を切り開いたといえよう。アドラーにはそうした思想的雄大さはないかもしれないが、その心理学の強みは、「幸福とは何か、健康とは何か、いかに人は生きていくのかということについて非常に明白でしっかりしたイメージを持

っている」＊6うえで、人間の心と行動の問題を解決へと実践的に導いた、という点にあるだろう。フロイトやユングは、こうした明確な解決法を示してはいないように思われる。この意味で、「フロイトが全力で新しい学問を打ち立てるために力を注いだとすれば、アードラーはそれを病人の苦しみを癒すために使ったのである」＊7。アドラーはウィーン大学出身であるが、大学の研究者になることはかなわず、おもに市民を相手にして、講義、講演をおこなった。フロイト主宰の研究会にも招かれ、その会長も務めたが、のちに学説上の違いから、そこを脱退する。彼の心理学は、「個人心理学」と名付けられた。彼は、社会主義にも強い関心をもち、社会民主党の教育改革にそって、児童相談所を数多く開いた。だが、ロシア革命には失望したという。ナチスの台頭のなかで、米国に家族と一緒に移住し（一八三五年）、そこで大学教授となる。スコットランドの講演先で、六七歳で心臓発作のため死す。以下では、アドラー心理学の個々の特徴を論ずる前に、その前提となる思想を考察する。

三、「アドラー心理学」の基礎にある人間観・社会観

アドラーによれば、人間個人の精神生活は、つねにその共同生活のあり方と分かちがたく結びついている。この点で、共同体の要求は、いわば「絶対的真理」である。「なぜなら、人間の個人的生活の前に、共同体はすでに存在していたからである。人間文化の歴史において、社会的に営まれなかったような生活形式は何ら存在しない。」＊8こうした共同体（社会）重視は、人間の進化の歴史によって決定されているという。アドラーは、進化論者ダーウィンを援用して、人間が、他の動物のようには、早い脚、鋭い爪、鋭敏な聴力や視力などももたず、生き残るためには、集団生活のなかで労働による「分業」を発達させる以外にはなかったと述べる。

そして人間を適応させ、安全でいられるためには、思考、感覚、行動のための「精神器官」が発達していかざるをえなかった。こうして、「すべての精神器官の能力は、社会生活がそのなかに含まれて担われる基礎のうえで発達する。人間のどんな思考も、共同体に適応できるものでなければならなかった」（S. 40. 三六頁）。さらにまた、共同体のなかで人々を結びつけるものは、とくに「言葉」であった。こうして、理性、論理、倫理、美意識なども、人間の共同的生活のなかにのみ、その起源をもっているといえる。

ところで、さきに「絶対的真理」といわれた根本的事実の重要部分は、アドラーによれば、マルクスとエンゲルスの作った「唯物論的歴史把握 materialistische Geschichtsauffassung」（S. 37. 三三頁）のなかに堅持されているという。つまり彼らの史的唯物論によれば、いわゆる「イデオロギーの上部構造」を規定するのは、経済的土台および技術形態だというわけである。アドラーは社会主義に強い影響を受けており、社会民主党員でもあったという＊9。だから、ここでマルクス、エンゲルスの思想が登場しても不思議はないだろう。いずれにせよ、アドラーを読む限り、その思想はたしかに、唯物論的といえるものだと思う。アドラーがみずからの心理学のなかで「共同体感覚 Gemeinschaftsgefuehl」、social interest」を重視する根拠も、実はここにあるのではないか。だから、アドラーは単なる理想主義を説いたわけではない。

しかし、まさに現実に適応するためにも、精神のありかたは、単なる自然とは異なる独特の性質と機能をもたざるをえない。アドラ

ーは「精神的生活における目標追求性」（S.31.二四頁）を強調する。つまり人間の精神とは、たえず一定の目標を設定し、それを実現すべく、みずから運動するものなのである。そこに自然の運動との違いもある。目標をもたずには、思考することも、感じることも、欲することも、それどころか夢を見ることもできないとされる。そして自然と異なり、人間はその目標を変えることもできる。さらに、多くの人は自分の目的をはっきり知らないで行動する場合もあるが、まさにそのさいは、その人の行動から、その隠れた目的を推測することができる。それこそ、心理学者の仕事である。以上の精神についての認識は、アドラー心理学で原因論ではなくて「目的論」を重視する発想につながるといわれる。

ともあれ以上のように、人間とは、徹頭徹尾「社会的存在gesellschaftliches Wesen」（S.50.四九頁）である。人間の精神も、まさにその目的は社会に適応することにほかならない。「個人心理学の目標は『社会』適応である」と明言される。アドラーによれば、個人はただ社会的文脈においてだけ、個人となれるのである。だからこうして、「個人心理学」と「社会心理学」の区別も実は存在しないのである。こう考えると、学校と保育園とは、社会制度のミニチュアのようなものであって、社会問題の準備段階として、そこでの問題が議論されることとなる*10。このように、アドラーは個人の問題と社会の問題をつなげて、発展的に考えようとしている。だが、明らかなように、アドラーはひたすら現存の社会制度に適応すればそれでいいというような、保守主義者ではない。

さて、アドラー心理学における人生の基本目標は、簡潔にいって以下の通りである。つまりそれは、行動面からすると、第一に自立すること、第二に社会と調和して暮らすことであり、心理面からすると、第一に、「私には能力がある」という意識をもつこと、第二に、「人々は私の仲間である」という意識をもつことである（『嫌われる』一〇九頁）。ここで詳しく議論できないが、以上の四つの目標は、アドラー心理学の大前提であり、この心理学はこれらの目標を達成するためにある。

四、アドラー心理学の特徴（目的論、ライフスタイル、人生のテーマ）

第一の特徴は、いま述べた、人間理解における目的設定重視という発想である。つまり目的論的人間観ということである。

アドラーによれば、個人心理学は、人生における「目的論」的な力に注目する。一般に人間は、将来にたいする夢を想定して現在の欠陥と困難を克服しようとしたり、理想をもとうとしたりする。子どもは一般に弱い存在だから、通例、強い大人をモデルにして生きるという目的をもつ*11。歪んだ形であれ、無意識であれ、どんな人間も、自分の人生に意味と価値を与え、そうして納得して（諦めても）生きている。こうしてそこに、劣等感によるコンプレックスや過剰な優越欲のように、病的な目的設定がなされる場合もある。だから、人間はただ、環境との因果関係に影響されて、受動的に動くわけではない。アドラーは、こうした個人の内発的傾向や力に注目し、そこに働きかけようとする。外部からの働きかけだけでは、けっして人は変われない。

『嫌われる』はその点に関して、フロイト的な「トラウマ［心的外傷］を否定せよ」、「トラウマの議論に代表されるフロイト的な原因論とは、かたちを変えた決定論であり、ニヒリズムの入口なのです」

（『嫌われる』三七頁）と明快に批判する。原因論（因果論）の決定論を乗り越えて、自分を変えようとする目的論を称揚するのである。わかりやすい例でいうと、「自分は両親の虐待を受けたから、社会に適合できない」と主張する人がいたとする。そのいわばトラウマに自分の人生が決定され、結果として自分が苦しんでいるわけである。これはどうしようもないと。だが、アドラー的にいうと、実はその人に、そう考えたい「目的」があるのだという。さしあたりは、外に出る不安を隠すという目的で、自分でトラウマの恐怖を作り出しているのだ。そして部屋に引きこもっていれば、両親の注目を引き続けることができ、自分が丁寧に扱われるようになる…。この人は自分の生き方に不満があるだろうが、さしあたり居心地はいいのだ。だからその人は、ある意味「目的」に沿った行動をとっていることに間違いない。ここでは歪んだ形ではあるが、「目的論」が働いている。

もしトラウマなどが絶対的かつ決定的ではなく、意識的・無意識的に本人がある目的で維持していたということが自覚されると、そうだからこそ、その目的を変更するという可能性が内発的に生まれる。つまり自己決定できる余地が生まれる。そこに「人生の嘘」、すなわち、自分に対する自己欺瞞が存在することも自覚される。いままでは前向きに生きる「勇気」が挫かれていたのであったが、ここで自分を変える勇気も湧いてくることであろう。こうして、目的論の立場を採用したことによって、自己変革のスタート地点に立ったのである。

第二に、原型とライフスタイルの主張である。

アドラーによれば、「原型　Schablone」とは、入学以前、四、五歳で形成される思考と行動のパターンであり、彼はこれを重視する。「ライフスタイル Lebensstil, Lebensschablone など」とは、原型を発展させて、形成されたものであり、この点で、原型が未熟な果実に、ライフスタイルが成熟した果実にたとえられる＊12。ライフスタイルとは、岸見氏のまとめによれば、自分のことをどう思うか（自己概念）、他者を含む世界の現状をどう思うか（世界像）、自分と世界についてどんな理想を抱いているのか（自己理想）を包括したものである＊13。ライフスタイルは、遺伝、器官劣等性、家族構成、社会環境などによって規定されるが、もちろん絶対的なものではなく、可変的なものである。「器官劣等性」とは、低身長、虚弱など、身体的な不利を意味する。また、「誕生の順位」が重視され、たとえば第一子は、誕生後しばらく安定した座を確保するが、次の子が生まれることによって、いわば廃位させられる。第一子では保守的な見方が優勢だといわれる。第二子は前の第一子に追いつこうと狙っており、革命的である。こうしてアドラーは、子どもの心理と行動を実に精細に観察している。

だからここで、アドラーは、可変的であるが、一種の因果関係を見ていることに間違いない。アドラー自身背が低く、幼いころクル病であったという。だが、そこで生ずる劣等感は悪いものではなく、優越しようとする努力の基盤ともなる。そしてそこで、自分はダメだという劣等コンプレックスに陥れば、歪んだ目的と価値観を担うことになる。したがって、因果関係と目的論は絡み合っているものである。

ところで、アドラーによれば、神経症はライフスタイルの病気である＊14。したがって、個別的な症状の治療は一応わきにおいて、ライフスタイルそれ自身の改良に取り組む必要がある。健全なパーソナリティをもてなければ、つまり他者との関係を有効に築けなけ

れば、症状は一時的に消えても、また別な症状が現れてくる。実はその患者は、家族らを支配するために、症状を必要としているとみなされる。だから、それは形を変えて現れてくる。こうして、患者は自分の人生の課題に向き合って、取り組まなければならない＊15。

第三の特徴は、人生の三つのテーマを明快に設定することである。人生の課題とは、個人が社会で生きていく限り、直面せざるをえない問題であり、そこから逃げないことが必要である。それは一言でいって、「仕事」「交友」「愛」という三つのテーマであり、それを円満に遂行することによって健全なライフスタイルが構築される。仕事の課題とは、労働を中心に他者と協力しあうことであり、ここでつまずくとニートや引きこもりとなる。交友の課題とは、仕事を離れた友人関係である。だから通例、学校や職場とは別にある。愛とは、恋愛関係や家族の関係（夫婦関係、親子関係など）で成立するものである。一言で「愛と結婚の課題」といわれる。一般にいって、社会適応ができず、共同体感覚（次節参照）が養成されていないと、これらの課題を遂行することはむずかしいとされる＊16。これら三つの課題は、対人関係の距離と深さの点で、段々とむずかしくなる。

こうした人生論風のテーマを明確に描くことは、いかに健全なライフスタイルを形成するかを考えるうえで前提となることであり、人生のなかでどこへ向かうかを考えるうえで指針となるものであろう。これら三つのうちのひとつを欠いても、健全なパーソナリティは形成されない。私見では、能力的にいって、仕事につけない人もいるかもしれないが、少しでもできるだけそれに関わろうとするべきではないか。さらにアドラー心理学では、「存在する」だけで、他者に意味があるということも強調される（『嫌われる』二〇八頁）。なお、最近のアドラー心理学では、そのほかに、趣味、レジャー、健康などの課題を扱う「セルフタスク」、理想的なもの、大自然への畏敬の念、宗教性などの課題を扱う「スピリチュアル・タスク」の二つが付加されることがある＊17。

アドラー心理学では、以上の人生の課題を発展的に考える。たった一人で生まれてきた子どもはまったく自己中心的であるが、仕事と交友関係を通して仲間意識が醸成される。愛によって人生の主語が「私たち」に変わり、そこからやがて共同体全体へと意識が拡張されていく。だから、ここでなされる「自立」とは、「自己中心性からの脱却」を意味する。そしてまた、仕事と交友の課題がうまく行かなければ、愛の課題も結局はうまく果たされないとされるが、たしかにその通りであろう。

五、アドラー心理学の特徴（課題の分離、承認欲求の否定、共同体感覚）

第四は、「課題の分離」である。『嫌われる』では、「これはだれの課題なのか」という視点から、自分の課題と他人の課題を分離していく必要性について強調される。「およそあらゆる対人関係のトラブルは、他者の課題に土足で踏み込むこと――あるいは自分の課題に土足で踏み込まれること――によって引き起こされます。課題の分離ができるだけで、対人関係は激変するでしょう。」（『嫌われる』一四〇頁）そしてだれの課題かを見分ける方法はシンプルであって、「その選択によってもたらされる結末を最終的に引き受けるのはだれか」を考えることで、判定されるという。

例を挙げると、子どもが勉強しないという選択をしたとき、その決断によって生ずる結末を引き受けるのは、子ども自身であって、親ではない。すなわち、勉強とは、子どもの課題である。「哲人」のこの断言にたいして、教師である「青年」は憤激し、「子どもに勉強させることは親の課題だ」と反論する。しかし親は、「あなたのためを思って」などというが、それが結局、親の見栄や支配欲、体裁のためにいっていることを、子どもはすでに見抜いている。だから子どもは反発するのだ。では放任すればいいかというと、そうではないと「哲人」はいう。勉強については、子どもが何をしているかを見守り、それが本人の課題であることを伝え、困ったらいつでも援助する用意があると知らせる。それが親のできる範囲であり、自分を変えることは自分でしかできない…。

「青年」は納得いかず、なおも食い下がる。このあたりの二人のやり取りはリアルで、思わず引き込まれる個所である。「青年」は、では、子どもが引きこもりになってしまったら親はどうするのかと、さらに質問する。「哲人」は、自分の子であっても、やはりこれは子どもの課題とみなし、介入しようとせず、まず過度に注目することをやめる。そして同様に、困ったときはいつでも援助する用意があると伝える。そうすると、親の変化を察知した子どもは、今後どうするかについて自分の課題として考えざるをえなくなるのだとされる。子どもとの関係で悩んでいる親は、「子どもこそわが人生」と考えてしまい、子どもの課題を自分の課題として抱え込み、いつの間にか、親の人生から「わたし」が消えている…。課題の分離の原則に従えば、「他者はあなたの期待を満たすために生きているのではない」のであって、たとえわが子であっても、親の期待を満たすために生きているのではない（『嫌われる』一四四頁）。

こうして、以上の課題の明確な分離が対人関係を一変させるものであり、「アドラー心理学ならではの画期的視点」になると宣言される（『嫌われる』一五〇頁）。まだ青年は納得しない。たしかにこのテーマは、他人に何か冷淡なようにも見える。とはいえ、課題の分離はまだ対人関係の最終目標ではないと、「哲人」は注意する。ともかく、このテーマは最後の「共同体感覚」や全体論のテーマにまでつながらなければ完成しないだろう。

「課題の分離」というテーマは、私にとってきわめて魅力的で覚醒させられるような力をもっていた。これは、ある意味常識的であるかもしれないが、徹底して考え抜かれた結果として提言されている。だが残念ながら、アドラー自身の著作のなかに、このテーマのきちんとした説明はないようである。いずれにせよ、このテーマはたしかに、アドラー心理学の一角をしめるにふさわしいものだといえよう。

第五の特徴は、承認欲求の否定と横の関係の主張である。

他者からの承認を求めることをあえて否定するという態度は、「アドラー心理学の大前提」（『嫌われる』一三二頁）であるという。これも何か納得しがたい感じがする。だが、さきの課題の分離の主張に従えば、われわれは他者の期待を満たすために生きているのではないが、承認を求めることは他者からの評価を気にしており、最終的には、他者の人生を生きることになるだろう。そこでは、個人の真の自立は妨げられる。他者が私をどう評価するかは、その他者の課題であって、自分にはどうともならない。とはいえ、「承認」の問題は、現代哲学の最前線のテーマでもあるので、次節で再論したい。人間関係を縦の関係からではなく、「横の関係」と見ることは、課題の分離や承認欲求の否定から自然と出てくることである。アドラー

によれば、親や教師は、子どもよりも大きい力や広い経験があるからといって、子どもに命令できると思ってはいけない。彼らは基本的に、子どもを自分と対等の存在とみなすべきである。そこから民主主義が始まる。つねに縦の関係に置かれると、子どもは従属的になり、勇気が挫かれ、自己決定ができなくなってしまう＊18。この点でアドラー心理学が、横の関係に基づく「民主主義の心理学」だといわれることは注目に値する（『幸せ』一四一頁）。

ところで、『幸せ』では、褒賞、賞罰は否定される。この制度のもとでは、他者が競争相手、敵とみなされてしまい、横の関係が築けなくなるからである。こうして、本当の協力関係ができづらくなる。「ほめない、叱らない」という態度も、ここから出てくる。通例、子どもの教育では、「ほめて伸ばせ」という方針がいわれるが、これが否定される。「ほめる、叱る」という態度は、結局、相手が生徒であれ、職場の部下であれ、相手を目下とみなし、縦の関係をそこで形成することとなる。この点で、「ほめることは“能力のある人が、能力のない人に下す評価”であり、その目的は“操作”である」（『幸せ』一三一頁）といわれる。おのずと承認欲求がそこで支配的となり、ほめられないとやらない、叱られるからやるという、依存的な態度が醸成されるに至る。「ほめる」のではなくて「勇気づける」ことがアドラー心理学の基本方針である＊19。

「よくやったね」は上からの評価であり、その代わりに「ありがとう」「助かったよ」というべきである。この表現は縦の人間関係を含まないとされる。ここで大事なのは、承認欲求の代わりに、共同体（社会）への「貢献感」をもてることであり（『嫌われる』二五二頁）、「ありがとう」といわれることで、それが満たされるのである（『嫌われる』二〇四頁）。こうして人間の幸福とは、端的に、この貢献感だと指摘される。このアドラーの主張は、議論を呼ぶところだろうが、徹底して考えると、また長期的に人生を考えると、やはり彼の主張が基本的に正しいのではないだろうか。

第六の特徴は、全体論と共同体感覚の主張である。これなしでは、アドラー心理学は画竜点睛を欠く。

アドラー自身はみずからの心理学を「個人心理学」と呼んだが、これは誤解を招く呼称かもしれない。これは単に個人主義を称揚する心理学ではない。これは、個人を分割されない（individual）全体と見るものであり、むしろ全体論的視点を含む。その意味は二重であると思われる。第一に、個人の行動や心理を、個人の全体の表現と見る。だから、個人の理性と感情、意識と無意識、肉体と精神などは、それぞれ実は何か対立的、分裂的なものではなくて、むしろ全体の現れであり、両者は相補的なのである＊20。第二に、世界の全体を共同体とみなし、それに個人は「共同体感覚」によって接近するという意味での全体論である。以下順に説明したい。

第一点については、「わかっているがやめられない」という態度を挙げよう。これは理性と感情の分裂を表現している。だが、理性も感情も一個人のものであり、実は感情もコントロールできないわけではない。子供を叱っていた母親が、その先生とばったり出会えば、急に愛想がよくなるようなものである。だが、分裂させておけば、さしあたり主体的責任は問われないですむ。そこに隠された意図がある。もし人が真に分裂していれば、そこにコントロールが効かない限り、修正は不可能であろう。またアドラーは、フロイトを批判して、意識と無意識を区別することに絶対的意味はないという。あらゆることが無意識の深みから意識へと昇ってくるのだ＊21。

第二点の全体論とは、世界全体を「共同体感覚」によって見ると

いう考えである。これは人々、他者を仲間とみなす意識である。人々を横の関係で見て、そこで共同体をつくろうとするが、これこそ健全なるパーソナリティというものである。この共同体感覚が欠如すると、問題行動のある子ども、犯罪者、精神病者、アルコール依存症などの人々が出てくる＊22。またこの場合の共同体とは、幅広いものであり、アドラー心理学では、それは、自分が属する家族から、学校、職場、社会、国家、人類という集団、さらに生物、無生物、宇宙の全体だという（S. 51. 五〇頁）。これは到達できない理想である。

いずれにせよ、さきの「課題の分離」は、共同体感覚へと継承・発展されなければ、アドラー心理学は十分なものにならない。

六、アドラー心理学に見られる逆説的状況

以上、私はアドラー心理学の六つの特徴を列挙したが、同時にそれらは緊密に結合している。そこにはもっと多くの論点があるが、以上で最低限の核心を認識できるのではないかと思われる。だが、いままでにも言及したように、アドラー心理学には、一見していくつかの極論ないし不合理があるように思われる。そして、いままで議論した事例はすべて普通の人々が体験してきた卑近なことであり、人びとは何らかの意味ですでにそれらを了解している。だからこそ、直ちに疑問や反発が出てきやすいし、多くの偏見もまたそこに現れるだろう。そしてそれは、学歴や職業の高低にほとんど無関係に生ずる。

一番大きな逆説は、アドラー心理学がすべての人々の心理学であり、アカデミズムから離れて人々のコモンセンスとして生き続けるといわれながら（『嫌われる』二七六頁）、他方で、それが常識へのアンチテーゼであるといわれる点である（『幸せ』二二七頁、二七六頁）。常識へのアンチテーゼであるという点では、①それがトラウマ的決定論を排して目的論を説いたこと、②人間の悩みはすべて対人関係に由来するということ、③承認欲求を否定すること、④ほめない、叱らないという教育方針を立てること、などの主張が見られる。

ここでまたいちいち議論しないが、②、③について少し言及したい。人間がすべて社会的存在であるというアドラーの主張からすれば、どんなに深い内面的悩みといえども、対人関係が絡んでいるという認識には根拠があるだろう。最初から一人で無人島で暮らしている人間には、悩みなどはなく、ただ生きる上での困難があるだけではないだろうか。

③については、おもにアドラーや岸見氏は、子どもの教育を念頭に置いている。だが、承認とは、対等平等な形での相互承認が基本である。アドラー心理学のいう承認欲求とは、まだ浅いレベルのものではないか。ヘーゲルが問題にしてきたような相互承認論とは、まずは市民社会におけるそれであり、経済的、法的な意味での社会内での承認である。『精神現象学』で議論された、有名な主人と奴隷の闘争と承認では、そこに成立するのは差別的な承認であって、まだ不完全である。立場の相互交換による共感を強調するアダム・スミス的な承認論も、ヘーゲルへと流れ込んでいる。こうして人々は、承認されることによって、みずからのアイデンティティを獲得する。たしかに承認には果てがないが、それは現実がそうだからである。最近では、ヘーゲルを継承して、ヘーゲル研究者でもあったチャールズ・テイラーらによる多文化主義における民族相互の承認論、さ

らにフランクフルト学派のアクセル・ホネットの承認論なども展開されてきた＊23。アドラーらの承認欲求の否定は、特殊なケースで妥当するものと思われる。

結局、すぐれた考えというものは、それが徹底化されているがゆえに、逆説的な言説へと至ることがしばしばある。それが浅薄な常識ではないからである。だが、それが普遍的真理であるがゆえに、人びとの高次元のコモンセンス（良識）には再び合致するといえよう。

七、アドラー心理学の問題点と現代的意義

さらにここで、アドラー心理学にまつわる問題点をいくつか述べたい。

第一に、認識の主観性の主張である。私が注意してきたように、アドラー自身は、目的論や現実への意味付けを強調しながらも、科学の名のもとに、現実や人間心理への因果関係の客観的究明をおろそかにはしなかった。ここで気になったことは、『幸せ』で、「我々の世界には、本当の意味での過去など存在しない」「歴史も時代の権力者によって改ざんされ続ける、巨大な物語だ」「今の『目的』に反する出来事は消去する」（『幸せ』六六頁）などと断定されると、これは一般論としては受け取れないということである。これは哲学的には不可知論だといえる。哲学からすると、こうした主張は問題をはらむ。

第二に、アドラー心理学には、いわゆる「心理主義」の傾向があり、またそれとの関係で、教育はカウンセリングだと断言していいのかという疑問である＊24。簡単には、心理主義とは、教育などの場で、子どもの心理に働きかけて、心を操作することによって、教育問題の解決を図ろうとする立場である。ここで教育現場や社会での疎外された問題状況が無視され、心理療法やカウンセリングが一方的に強調されるのである。だが、社会民主主義に賛同していたアドラーには、そういう傾向はなかったといえるだろう。またアドラー心理学で、教育がカウンセリングだといわれたときも（『幸せ』一一六頁）、そこでライフスタイルの形成と改良を目指した限り、けっして現実の問題から目をそらせたことはなかったと思われる。それはいままでの議論の端々にうかがえるものであった。

第三に、アドラー心理学は自己責任を強調したりして、現代の新自由主義に親和的なのではないかという疑惑である。この点で、「『自己責任論』へ悪用の恐れ」＊25などと指摘される。だが、自己責任は正しく問われれば必要なものであり、責任をもつということは、共同体感覚の一部である。逆に、アドラーは競争や他者からの評価を徹底して否定したのであって、縦の関係も否定した。その点で、根本的には、新自由主義とはまったく親和的ではない。ただ、「あなたの不幸は、あなた自身が『選んだ』もの」（『嫌われる』四四頁）と指摘されるとき、これが一般化できないことはもちろんである。心理的に、そういう側面もあるということだろう。

アドラー心理学は、徹底して日常的な現実を離れることはなかった。この論文で挙げられた事例もすべて卑近なものであった。そして彼は、人々が日常で抱える悩みや問題に目を据えて、その解決を実践的に目指そうとした。実はこうした日常的な悩みは、職業や学歴の差異に関係なしに、だれでも体験するものである。学者、インテリ、エリートなどのほうがむしろ、人間的には問題を抱えていることも多い。アドラー心理学のような内容を軽視する者は、かえっ

て低レベルのライフスタイルを身につけるかもしれない。アドラーはみずからの「人間知」を本から得られる知識ではなくて、実践的に習得されるものだと強調した（S. 23. 一四頁）。現代の寄る辺ない現実を生き抜くには、人間疎外の根本的発生要因である現実問題に関心をもつとともに、アドラー心理学のような良質の「人間知」が必要であろう。

＊1　岸見一郎・古賀史健『嫌われる勇気』ダイヤモンド社、二〇一六年（初版二〇一三年）。同上『幸せになる勇気』ダイヤモンド社、二〇一六年。以下、前著を『嫌われる』、次著を『幸せ』とそれぞれ略記する。なお岸見氏は、次著のほうで、この前著が「アドラー心理学の入門書にして決定版」を目指したと自負する（『幸せ』二九一頁）。私は『嫌われる』について、すでに書評を書き、本書のポイントを紹介・検討した。東京唯物論研究会編『灯をともせ』第二三号、二〇一六年発行予定。

＊2　『毎日新聞』二〇一六年五月一九日夕刊。

＊3　『週刊ダイヤモンド』二〇一六年七月二三日号、五七頁。

＊4　岩井俊憲『7日間で身につける！　アドラー心理学ワークブック』宝島社、二〇一六年。

＊5　ウィーン世紀末状況については、拙著『ウィーン発の哲学』未来社、二〇〇〇年の第二章「世紀転換期の思想と文化」を参照。アドラーの生涯については、おもに岸見『アドラー心理学入門』ＫＫベストセラーズ、二〇一六年、による。

＊6　前掲『アドラー心理学入門』三八頁。

＊7　ウィリアム・ジョンストン『ウィーン精神』1、井上修一・他訳、みすず書房、一九八六年、三九八頁。

＊8　Alfred Adler, Menschenkenntnis, Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main 2001, S.38.　岸見訳『人間知の心理学』アルテ、二〇一六年、三四頁。以下、本書に関しては、原典と翻訳の頁数を本文中に記す。なお同書と、後続の岸見訳『性格の心理学』アルテ、二〇一五年、を合わせて、Menschenkenntnis の全内容をなす。

＊9　ジョンストン、前掲書、三九六頁による。

＊10　アドラー『個人心理学講義』岸見訳、アルテ、二〇一六年、一二三頁以下参照。

＊11　前掲『個人心理学講義』九頁以下参照。

＊12　前掲『個人心理学講義』第四章と八六頁参照。

＊13　岸見『人生の意味の心理学』ＮＨＫ出版、二〇一六年、二八頁。

＊14　前掲『個人心理学講義』一六五頁。

＊15　アドラー、岸見訳・注釈『勇気はいかに回復されるのか』アルテ、二〇一四年、一一〇頁。

＊16　以上の三つの課題については、前掲『個人心理学講義』一二九頁以下など。『嫌われる』一〇八頁以下参照。とくに愛については、『幸せ』の第五部「愛する人生を選べ」で詳論される。

＊17　岩井、前掲書、二七頁参照。

＊18　前掲『勇気はいかに回復されるのか』一一三頁以下参照。

＊19　前掲『週刊ダイヤモンド』六〇頁では、「ほめる」と「勇気づける」の違いが図式によって明快に説明される。

＊20　この点で、岩井、前掲書、七〇頁の説明は有益である。

＊21　前掲『個人心理学講義』二六頁、九九頁以下参照。

＊22　前掲『個人心理学講義』一六頁以下。

＊23　相互承認行為によってこそ、真の自由が獲得される。この点では、高田純『承認と自由』未來社、一九九四年参照。またテイラーらについては、拙著『現代を読むための哲学』創風社、二〇〇四年の第二章「近代的価値観から多文化的共生への歩み」を参照のこと。ホネットについては、山本啓・直江清隆訳『承認をめぐる闘争』法政大学出版局、二

○一四年など参照。

＊24　この点では、拙論「『心理主義』の流行とカウンセリング・心理療法の是非をめぐる問題」、季報『唯物論研究』第一〇〇号、二〇〇七年を参照。

＊25　前掲『毎日新聞』。